

大震災から一年

諸堂修復果たし、退董式と晋山上堂を挙行

阪神・淡路大震災から一年――。被災地の人々は復興への長い道を歩きはじめている。曹洞宗の慈照山東福寺の圓通幸温住職は、いち早く伽藍修復を終えたのを契機に住職引退を決意し、一月十五日に大本山永平寺の宮奕保貫首を迎えて、住職退任（退董）式と良樹新命の住職就任（晋山）式、並びに伽藍修復落慶法要、震災横死者諸霊一周忌法要等を厳修した。

東福寺は明治の末、三重県出身の嫩林（圓通）祖道大和尚が神戸・湊川のほとりに庵を結んだのが草分けで、明治四十五年、現在地に土地八百坪を購入して伽藍を整備。本尊に一光三尊の善光寺如来を勧請し、宗派を超えた布教活動を展開して“小野の善光寺”と呼ばれた寺である。開山遷化の後、昭和三十九年に三世を継承した幸温住職は、三十余年の間、空襲を免れた開山当時の伽藍護持に心魂を注ぎ、六角鐘楼堂の建立をはじめ境内諸堂の整備につとめてきた。

だが丹精込めた伽藍は昨年一月十七日の大震災で壊滅的な被害を蒙った。神戸市の美術建造物指定の本堂は大きな亀裂を生じ、外塀が崩れ、鐘楼堂は柱が根元から折れた。一年がかりで修復を果たしたが、総ケヤキの荘重な本堂を元通りに再現することは経済的にもとうてい叶わなかった。そうした中で、幸温住職は、体調が十全とは言えない状態にあることに加えて、震災で深い無常感を味わったのだろうか。副住職に住職を譲り、宗議会議員をも引退するを一人決めた。

退董式で「陣退鼓の辞（慰労の辞）」を述べた兵庫県第一宗務所の三輪昌伸所長は、幸温前住職が花園大学で山田無文学長に師事して「碧巖録」の提唱に参じた求道の人であることを紹介。兵庫県有道会の長谷川禅道会長は弱冠三十五歳で宗務所長をつとめた後、宗議会議員として活躍してきた幸温前住職の「宗政に対する熱意と信念」を後任者が継承するよう要望。宗議会の先輩であり、また道友として深く交わってきた千代川耕宗議員は「私は二年先に宗議になり、年齢も十歳ほど上だが、いろんなことを教えていただいた。この方の厳しさは、その中にいつも温かいものが流れている」と感懐を吐露して、六十三歳の早すぎる引退を惜しんだ。

退董式香語

曾逐白雲登此顛
今随流川下爰嶺
現成公案非私事
出處適宜之自然
良久
當山桂錫三句剝
回顧歷程慙瓦全

「出處宜しきに適（かな）うは之れ自然」と退鼓を打った圓通幸温前住職【写真は省略】

空襲を逸れた本堂は震災で大きな打撃を受けた【写真は省略】

六角鐘楼も修復され、境内は落ち着きを回復【写真は省略】

新神戸駅から生田川沿いに下ると伽藍がある【写真は省略】

宮崎貫首の導師で震災横死者の小祥忌が営まれる [写真は省略]

須弥壇上で晋山の決意を披瀝する良樹新命 [写真は省略]

玄関に「東福寺名誉住職」の表札を掲げる [写真は省略]

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)